

2020 読書メモ 1月号

藤森かよこ著

『馬鹿ブス貧乏で生きるしかないあなたに

愛をこめて書いたので読んでください。』

(KK ベストセラーズ・2019年) (私物)

やなぎさわかつひろ

柳沢克央 (信州・上田仮説サークル)

2020年1月25日(土), 1月例会用レポート

○はじめに…少しばかり「年頭の辞」ふう

「年末年始読書三昧」としてこうしたメモを書き始め、すでに3年が経過しました。あっという間でした。2019年末に「アウトプットをすることの大切さ」に改めて気がつき、2020年もこのメモを書くことを続けること即決しました。

「考えることは書くことに通ずる」、私の場合、読書をするのと考えること、書くことは一体不可分です。

上田仮説サークルのみなさま、その他の読者の皆様にこうした独断と偏見に充ち満ちたメモを読んでいただき、ありがとうございます。平素、おつきあいいただけることに深く感謝いたします。

人間は物質と情報と時間の流れに乗って生きています。一人の例外もありません。ご縁があって交流できているみなさまと、楽しく考えて生きていくことができれば幸いです。よろしくおつきあいのほど、お願いいたします。筆者謹白。

○今月までに読んだ本（順不同）

◆立川談慶著『談志語辞典』（誠文堂新光社・2019年）（私物）

無敵の面白さ。立川談志の魅力が満載。上達論，人間観察，哲学，名言，発想法の宝庫。私はこの本を著者の最高傑作だと思っている。

◆小笠原喜康・片岡則夫共著『中高生からの論文入門』（講談社現代新書・2019年）（私物）

課題研究・探究学習に戸惑いがちな中高生，および指導担当教師に最適な本。読み易い。そして，記述は具体的でわかりやすい。ただし，きちんと読解できる中高生は多くないだろう。そこで，まず教師たちがこの本をきちんと読みこなした上で，自信を持って生徒たちに接するということが大切だと思う。

具体的には先行研究などを読解して，自分だけの問いを立て，それを解決する手法を考え，実験ないし実践し，適切な形にまとめて発表することができれば成功である。

課題研究の標準的な手法の基盤とすることができるので，本書の意義は大きい。大いに活用していきたい。

◆山口周著『ニュータイプの時代』（ダイヤモンド社・2019年）（私物）

正解を探す→問題を探す，予測する→構想する，KPI（重要業績評価指標）で管理する→意味を与える，生産性を上げる→遊びを盛り込む，ルールに従う→自らの道徳観に従う，一つの組織に留まる→組織間を越境する，綿密に計画して実行する→とりあえず試す，奪い，独占する→与え，共有する，経験に頼る→学習能力に頼る，という価値観の転換がイノベーションの鍵になるということが主張されている。面白い。知的な訓練になった。

◆おおたとしまさ著『大学入試改革後の中学受験』（祥伝社新書・2019年11月）（私物）

「大学入試改革」が急速に進行中だ。必要な情報を得ながら，子どもの特性を見極めて，地に足の着いた対策をとっていくことが必要だということが読み取れた。慌てず，騒がず，淡々と，本物の勉強を積み上げるところから非凡で創造的な営みが生まれていくのではないだろうか。大学入試改革の動きが「中学入試改革」および「中学校の教育改革」という思わぬ産物を生み出しているようだ。刮目して展開を見守っていきたい。

◆ユヴァル・ノア・ハラリ著『21Lessons (21世紀の人類のための21の思考)』
(河出書房新社・2019年11月)
来月報告予定。

◆野村進著『調べる技術・書く技術』(講談社現代新書・2008年)(鳩祭で入手・私物)

ちょっと尻すぼみだがオモシロイ。ノンフィクション・ライターの取材から執筆までの技術を惜しみなく具体的に公開している。具体例が当時の時代を感じさせるものであり、読者によって興味のあるなしが分かれそうであるが、そこがノンフィクションの特徴でもある。「知的生産術」分野に関心がある人向け。当然ながらネット検索に関する部分などは古くなっているが、それは仕方ないこと。礼儀作法に関することなどは今の高校生が読めばかえって新鮮かも知れない。たとえば応接室で待つ時には相手が来るまでソファに腰を下ろさないで立って待っているのは常識だ…というようなことがきちんと具体的に書かれている部分は貴重である。

◆細谷功著『自己矛盾劇場』(dZERO・2018年)(私物)

「自分の頭で考えろ」といわれてそう考え始めるとするのは「自分の頭で考えているとは言えない」というような、ちょっと可笑しい、そして本質的な自己矛盾のリスト。知的な訓練に最適。ここでも「視点の転換」＝「メタ認知」が大切だということが分かる。自己矛盾の三つの特徴。①自ら気づくことは極めて難しい。②気づいてしまうと、他人の気づいていない状態が滑稽でたまらない。③他人から指摘されると「強烈な自己弁護」が始まる。皮肉だが、自分を見直すために役に立つ。他人を攻撃するために使うと嫌われる。

◆茂木健一郎著『脳を活かす勉強法』(PHP・2007年)(鳩祭で入手・私物)

この本はよく書けている。脳の機能を最大限発揮させるための方法論が具体的に記されている。「まえがき」に茂木健一郎さんの才能がどのようにして開花したかについて、手間を惜しまず、丁寧に書かれており、この「まえがき」が出色の出来。この部分を読むだけでも十分に本書を求める価値がある。ほかに「フロー」(いわゆるスポーツ選手の実力が最大限に発揮される状態「ゾーン」とほぼ同じと読み取れる)に入るための方法についての記述が興味深い。取り上げられている具体例がやや時代を感じさせるが、普遍的な内容なので、ほとんど問題なく現在でも読みやすい。平易な記述で、高校生でも十分に読みこなせる。これから持っている自分の潜在能力を最大限に引き出したい高校生にも、

そしてその指導者たちにも強くオススメ。

◆木村吉宏著『木村塾の奇跡』（PHP・2019年）（私物）

著者は成功している塾経営者。「明るく、元気に、謙虚に利他の精神を大切にしてお勉強に励めば道は開ける」という前向きなエピソードを集めた本。平易で読みやすく、説得力がある。出し惜しみしない姿勢が素晴らしい。成功する経営者の生きる姿勢は、教え子たちに伝わるものなのかもしれない。この本から普遍性を汲み取って、劣化コピーにならないように用心しながら応用してみるといいかもしれない。

◆辻田真佐憲著『文部省の研究』（文春新書・2017年）（私物）

文部科学省は設立の昔から時代の要請と理想主義との板挟みにあって、何度も非常に難しい立場にたたされてきた組織であったことが分かる。ただし、会社と違って一貫した経営方針がないため、無責任で無節操な運営を総括する機会がなく、また、厳しく追及される場面もなかったため、こんにちの体たらくとなっている（らしい）、少し同情してしまうが、もはやイデオロギーの空中戦だけで終わらせるわけにはいかない。かといって、実利だけに傾いてしまったら教育理念も何もあったものではなくなってしまふ。さて、これからどうするのが良いのか。厳しく問い続けなければいけないということだけは確かであると思われる。

◆川上徹也著『ザ・殺し文句』（新潮新書・2016年）（私物）

短いことばで聴き手の心を揺さぶるための手法が満載されている。ただ、ストレートに応用することは私には少し難しいので、時間をおいて再読してみたい。殺し文句の法則、①「あなただけ」を強調する。②相手の利益を語る。③二者択一で問いかける。④リスクを負って断言する。⑤プライドをくすぐる。⑥下手に出る。⑦巧みな比喻で語る。⑧大義を訴える。⑨相手の発言に乗っかかり、切り返す。⑩本気でぶつかる。……言うは易く、行うは難し。とはいえ、意識化できていればメリットは大きいだろう。

◆ユヴァル・ノア・ハラリ著『ホモ・デウス』（上・下）（河出書房新社・2018年）

来月報告予定。

◆山口周著『武器になる哲学』（KADOKAWA・2018年）（私物）

「ビジネスに特化して哲学本の紹介本を書くところなる」という手際のよい見本。有用かどうかはこの本に基づいていくつかの本を実際に読んでみてから初めてわかる。「たのしい哲学」は有用である。

◆山口周著『仕事選びのアートとサイエンス』（光文社新書・2019年）（私物）

「素晴らしい成果を上げてきたことよりも、人間としてぶれない美意識や規範を持っていることを重要視する。誰に対しても自然体でいいやつである人の方が、結局は成功する確率が高い」（149 ペ）。「ロジカル・シンキングだけでは新しい価値を生み出すことはできないと認識しつつ、最低限のロジカル・シンキングの能力を獲得しておくことが大切」（159 ペ）。「現在、情報量が爆発的に増大したために、アテンション（注意力）の値崩れが起きている」（211 ペ）。この本からも結局、「古典に基づいて健全な常識を養い続けることが大切である」ということを学んだ。

◆伏見康治著『光る原子，波うつ電子』（丸善・復刻 2008年・原著 1941～1944年）（舟橋春彦さんの推薦で入手）

著者が大戦中において極めて高い水準の啓蒙書を書いていることがよく分かった。丸善がまとめているところに手堅さを感じる。さすがというべきであろう。舟橋さんに感謝します。こういう本が簡単に手に入るから、やはり amazon はありがたい。

◆堀古英司著『リスクを取らないリスク』（クロスメディア・パブリッシング・2014年）（鳩祭で入手）

リスクを少なくするように細心の注意を払いつつ、社会の変化に対応することが必要だということが読み取れた。健全な攻めの姿勢が大切だ。

◆佐々木常夫著『40歳を過ぎたら、働き方を変えなさい』（文響社・2017年）（講演会で入手）

明解・平易なビジネスマン向け自己啓発本。成功者の具体的な言説には説得力がある。正統派。昨年、千曲市での講演会に参加して入手。働き方、勉強の仕方を見直す時に役に立つ記述が満載。例えば「苦手な上司とはゲーム感覚で付き合え」「意見を言う時には具体的な数値を挙げて端的に述べよ」「多読より、限られた。選び抜かれた数冊の本を繰り返し読むほうが価値が高い」など、聴いてみれば当たり前のことばかりだが、いつも実践している人が少ないと思われることが多数、挙げられている。板倉聖宣著『発想法かるた』をザッと読み

直してみるのと同じように「自分の仕事ぶりを見直してみる」ときのきっかけとして活用できる。

◆藤森かよこ著『馬鹿ブス貧乏で生きるしかないあなたに愛をこめて書いたので読んでください。』（KK ベストセラーズ・2019年）（私物）

この本はすごいです。フェミニズムの歴史の上でも、自己啓発本の歴史の上でも、また、ブックオブブックス（読書案内）の歴史の上でも、高校生向けのキャリア教育本の歴史の上でも、燦然と輝く金字塔！（ただし、言葉汚い、表現が屈折している！という下品さの尺度においても金字塔！）画期的！でも、紹介されてる本は綺羅星のごとくに輝いている。磨き抜かれた表現で痛烈な皮肉のパンチが炸裂。本当に輝かしい本。才能もなく、美貌もなく、財産もない普通の人間は読書によって自分に磨きをかけて武装しながらこれから訪れる陰しい社会を生き抜いていくしかないという異常な決意に基づいた本。当たるか当たらないかも大切だが、実践するかしないかも切実。健康にたくましく生き抜こうとの決意をもたらしてくれたありがたい本。

◆サン=テグジュペリ作『星の王子さま』（岩波少年文庫・初版 1953年）

現代社会を生きる人間のための「解毒剤」または「清涼剤」。時たま読んで見るのがよいと思う。「リセット」できる。

◆リップシャッツ信元夏代著『20字に削ぎ落とせ』（朝日新聞出版・2019年）

人は「失敗・不満・初めての体験・欠点」に注目しやすい。ストーリーを構成して、魅力あるプレゼンテーションを目指そう、という前向きな主張。最後のチェックリストは役立つ。

◆野口悠紀雄著『「超」AI整理法』（KADOKAWA・2019年）

「捨てなくてよい。検索して引っかかる状態にしておけばテキストでも画像でもすぐに活用できる時代になった。発想の転換と実践が必要」ということが書いてある本。

◆山口周著『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？』（光文社新書・2017年）

「経営においては、直観と論理もどちらも大切にすべきもの。現在では論理に重点が置かれ過ぎている」（41 ペ）、「武道修行における《守・破・離》の論理展開は、経営の上で役に立つ」（65 ペ）、「イノベーションの過程では「非論理的」

ではなく「超論理的」ともいえるような意思決定が行われいている（65 ペ）、「言語化できることはすべてコピーできるが、ストーリーや世界観は高い水準の美意識に基づくものであり、コピーできない」（121 ペ）、「人間に美学やモラルがなぜ必要なのか」というと、長期的な視点から見て、効率がいいからである」（139 ペ）、「高度な意思決定の能力は（論理的なものであるというよりは）、直観的・感性的なものである」（164 ペ）、「戦略的コンサルティング業界と新興ベンチャー業界は《極端なシステム志向》と《美意識の欠如》《極端に階層的でシステムティックである》という点においてオウム真理教と類似している」（171 ペ）、「日本人には哲学教育が欠けている」（231 ペ）、「精神のない専門人、心情のない享楽人、この無のもの（ニヒツ＝現代のエリート）は人間性のかつて達したことの無い段階にまで登りつめた、と自惚れるだろう」（マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』より）（252 ペ）→古代ギリシャ以来の「真・善・美」の追求が現代にこそ必要である。

◆岡本薫著『日本を滅ぼす教育論議』（講談社現代新書・2006年）（再読）（私物）

「日本人はマネジメントが苦手」「日本人は手段の目的化に陥りやすい」「教育をマーケット・メカニズムと過度に結びつけて考えることはマイナス効果をもたらす」「権限と責任を峻別することが大切」「ルールとモラルとを混同してはならない」など、今もなお古くなっていない、普遍的な説得力の高い内容を持つ本。

◆橘玲（たちばなあきら）著『上級国民/下級国民』（小学館新書・2019年）

再読。読めば読むほど味がある。日本ははっきりと「格差社会」または「階層化社会」へと移行しつつあることが切実な問題として読み取れる。それは大多数の人にとって「貧困化」、もっと激しく進む恐れさえある。私たちが接している子どもたちが否応なく直面する問題である。あらかじめ、自己の能力を自ら開発して、可能性を伸ばそう（少なくとも、自ら勝手にリミッターをつけて抑圧することを意識的に避ける、家族や教師も気をつけて接する）とする姿勢が求められる。

◆加谷珪一（かやけいいち）著『億万長者の情報整理術』（朝日新聞出版・2015年）

情報の仕入れ方と、そらの「行間を読む」すなわち、「読解する方法」を説く。マスメディアはあくまでも利益を追求する会社組織であるゆえに、真実を伝えると言っても、きちんと読みこなさいと意味がないこと。これは「フェイ

ク・ニュース」論の先駆けであるといえる。また、カルロス・ゴーン氏の経営手法についても大いに問題があること、日本が観光大国への道を順調に歩み続けていることとその理由についても具体的に指摘し、ますます訪問者が増えるであろうことを 2015 年の時点で予言していることなどはさすがである。

◆半藤一利・出口治明共著『明治維新とは何だったのか—世界史から考える』(祥伝社・2018年)(私物)

「司馬史観」は最近、いろいろな方面から「疑問符」がつけられ始めているようだ。半藤氏は約 20 年前から「反薩長史観」を唱えて、ブームの先駆けとなった人。出口氏は東西の歴史に通じた読書家。二人の対談は読む人が読めば面白いのだろうが、柳沢は歴史の知識が少ないため、二人がどれほど刺激的な話をしているのか、よくわからなかった。すこし時間を置いて、もう一度読み直してみたい。

◆野村克也著『野村の流儀』(ぴあ・2008年)(私物)

力のこもった野村克也氏の名言集。ランダムに一例を挙げる。「なぜ私はボヤキと捉えられかねないことを口にするのか。それは私が恥をさらすことを恐れていないからである」—それに続く解説。「ボヤキの哲学。捕手は理想主義者であるべき。理想と現実のギャップがボヤキになる。」捕手出身で西武監督 9 年間で 8 度のリーグ優勝、6 度の日本一を遂げた名監督、森祇晶(まさあき)とともに、”森の愚痴、野村のボヤキ”と揶揄された。根底にあるのは、むき出しの飽くなき向上心。自分の無知を知り、それを明らかにすることを恐れない。これぞ野村の芯の強さであり、謙虚さであり、そして真の自信でもある。(217 ペ)

○まとめ

本でも書類でも、何でも、読めるときには驚くほどたくさん読めるが、そうでないときにはそれほどでもない。…どうも読書のスピードは滑らかに変化するのではなく、数段階にギア・チェンジするような形で向上していきのではないかと思う。

スピードを上げる方法としては速読という手法があるらしいが、そんなに大げさなものなのではないのではなかろうか。…どうも私は大ざっぱに読むという前提でなら、10分とか20分という風に時間を区切って読むことは案外簡単にできるのではないか。〔2020年1月24日(金)15:30〕